『人文学報』第116号（2021年３月）
（京都大学人文科学研究所）

「山本 明氏旧蔵コレクション（山本明社会藝能文庫）」について

高　木　博　志*

2015年４月より人文科学研究所では，「みやこの学術資源研究・活用プロジェクト」に取り組んできた。その目的は，京都大学の人文学研究が長い時間をかけて，学術資源（図書・史資料・フィルム・録音データなど）を集めてきたが，その研究・活用により，未来へ生きるための学知を，現代社会と向き合いながら時間をかけて生み出すことにあった。

プロジェクト発足まもなくの同年10月17日に，国立映画アーカイブ主任研究員・冨田美香氏を通じて，映画研究者の紙屋牧子・鷲谷花両氏が，故山本明氏の膨大な資料群の受け入れ研究機関を探しているとの連絡があった。山本明は，コップ（日本プロレタリア文化連盟）出身で，戦後，関西における映画・演劇などの文化運動の中心的な担い手であった。同年11月15日にJR立花駅で，紙屋・鷲谷両氏，人文研の水野直樹・高木で待ち合わせ，ご子息の山本愼一氏により尼崎市立花町の木造２階建ての文化住宅の１軒に案内された。もともと山本家は，尼崎市七松町の６畳４畳半・台所の長屋に膨大な図書・資料類とともに生活していた。一枚のビラも粗末にしないようにと子供たちに伝えられた大切なコレクションだった。若き古志俊氏など文化運動の活動家が集まると，かんてき（七厘）ですき焼きが始まったと長女綾子氏・長男愼一氏は回想する（2020年12月６日聞き取り）。

1977年に山本明が亡くなったのち，遺族は，衣装箱110箱にのぼる資料群の保存のためだけに，2010年から文化住宅の１室を借りていた。生前の山本明の文化活動には妻・壽々代の人形教室による経済的な支えや家族の協力があり，没後には愼一氏による献身的な資料整理・保存，そして基礎的な目録作成の努力があった。翌2016年１月10日には，山本明とともに映画サークル運動を担った古志峻氏，山本愼一氏・妻洋子氏，姉綾子氏から，山本明の戦前・戦後の活動を聞くとともに，今後の方針として，なるべく愼一氏が作成した目録を尊重しながら閲覧に供する整理を行うことを確認した。また関西は日本共産党の六全協までは所感派の影響が強かったこと，資料群には山本明宛の私信や彼の活動の記録があること，自立的な活動で

*たかぎ　ひろし　京都大学人文科学研究所

あった地方のサークル運動が明らかになるなどの教示を受けた。

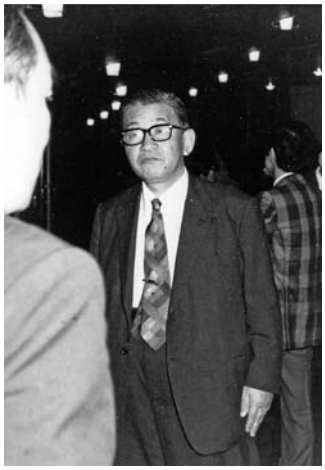
山本明の紹介は，後掲の古志峻氏の文章に譲るが，山本は1930年代のプロレタリア文化運動から戦後の労働組合映画協議会・北大阪映画サークル協議会などを通して，労働者の立場に立ち，文化運動を一貫して担った。この分野の学術資源としては，日本でも最大級のコレクションである。とりわけ戦前から1960年代まで，映画や演劇が文化運動の中心として活発であった時代における資料群である。山本明が亡くなった1977年時点のコレクションが，そのまま40年近く凍結され保存されたゆえの豊かさがある。森岡洋史氏が「山本明コレクションの映画資料概要と整理方針」でも指摘するように，映画サークル協議会の事務局書類は一次史料として無二であるし，全国の地域の映画サークルの機関紙が多く残り，地域のサークル運動・文化運動の活動が明らかになる。

また旧帝国大学の図書蒐集は社会科学が中心で，人文系は前近代に片寄りがちであり，近現代の映画や芝居・大衆文学などに関する図書や資料が少なかった。しかし「山本明氏旧蔵コレクション（山本明社会藝能文庫）」には，映画・芝居のパンフレット，チラシ，ポスター類のみならず，京都大学に未所蔵の膨大な映画・演劇関係や文化運動関係の図書・雑誌が含まれていた。それらの図書・雑誌は受け入れ後，5年間を経て，人文科学研究所図書掛の協力をえて，すでに備品登録されて，人文科学研究所図書室で公開されている。

なお同じく冨田美香氏の紹介により，マキノ映画の宣伝部長をつとめた「都村健氏旧蔵コレクション」も人文科学研究所図書室に寄贈され，映画・演劇関係を中心に2000冊以上の図書・雑誌がすでに整理されて公開されている。これらは映画史研究が盛んな京都大学のみならず全国の学術資源として活用されている。

なお「山本明氏旧蔵コレクション」の学術資源としての意義に，いち早く気づいたのは鷲谷花氏であった。2014年の神戸映画資料館での幻灯『戦争案内』（ブレヒト作）の上映を通じて

写真2点は山本明（山本綾子氏提供）。
右は1969年4月撮影。



古志峻氏と知り合い，同コレクションを紹介された。古志峻氏は，山本明が委員長であった全大阪映画サークル協議会の事務局メンバーであり，関西幻灯センターで幻灯の制作や「記録映画の会」を主宰した。また関西国民文化会議の「ドイツ・グループ」のメンバーとして，機関誌『黒いポンプ』を発行し DDR（旧東ドイツ）との文化交流を進めた。最後に古志氏による「山本明紹介」を全文掲載したい。

＊　＊　＊　＊　＊

山本　明 紹介

山本　明は，明治四十四年六月十六日，兵庫県龍野市龍野町下川原で，山本退藏・浅の長男として生まれました。

兵庫県龍野中学卒業，早稲田高等学院をへて早稲田大学政経科入学，在学中からプロレタリア文化運動（略称　コップ）に参加しました。当時，日本プロレタリア演劇同盟（略称　プロット）は国際労働者演劇同盟（略称　IATB）の日本支部でした。山本明は，その組織部にいて，土方與志・村山知義・滝沢修・佐々木孝丸氏らとともに，築地小劇場で活動しました。

昭和七年秋から翌年の初めにかけ，日本共産党に対する弾圧が始まり，日本のファシズムは，治安維持法による思想言論弾圧を強化し，社会主義をはじめ，あらゆる自由主義的な言論にさえ強圧，禁止するという暴挙を強行しました。

この暴圧下，日本のプロレタリア文化運動は，よく抵抗しました。山本明も多くの同志・諸先輩とともに権力の網の目をくぐりながら初志を失うことはありませんでした。

昭和九年ごろから，運動は幾度となく弾圧に抗して再建を試みるが敗れ，山本明の属する「プロット」はこの年，解体されました。

こののち，「新協劇団」に加わっていますが，関西に移り，東宝北野劇場に入ります。

昭和十一年頃，幼稚園・小学校・中学校時代以来の友人であり，同志であった眞殿久治（一九〇八～一九九〇。昭和六年　日本共産党入党。全協東京支部江東地区オルグ）は，山本明が，療養中の自分に，レーニンの「共産主義における左翼小兒病」を持参し，「階級闘争に関する本やブルジョア新聞も集めているんだ」と話したと伝えています。

昭和十五年はじめ，北野劇場で新協劇団は「大仏開眼」を公演しますが，山本明はこの公演の観客動員，組織化に奔走しています。このころ，久保栄・宇野重吉らとの往来も，時代の流れに抗する支えになっていたでしょう。

太平洋戦争中は，三光造船・三光汽船に在籍，兵役を免れました。

昭和二十年八月十五日，日本が降服すると，山本明はすぐ行動を開始します。翌年一月，共産党入党，六月，日本民主主義文化連盟大阪地方支部書記長代理に就く。「関西自由人クラブ，統一戦線新聞，大阪人民新聞」発行などに尽力します。

昭和二十三年四月，阪神における在日朝鮮人の自主学校閉鎖に抗議する日朝人民は，占領軍に抗してはげしく闘いましたが，米占領軍は戦後第一号の戒厳令を施行しました。この非常事態宣言下，山本明は神戸の米軍に逮捕され，神戸湊川署に留置されました。五月一日メーデー当日，留置された人々は，警察署長と団体交渉，屋外から聞こえるメーデー歌に呼応して留置場の中で，メーデー式典を挙行し，山本明はその司会を行っています。かれは，かねて文連の方針にそくして構想していた労働組合映画協議会結成に着手し，六月二三日，松竹労働組合協力のもとに，関西労働組合映画協議会（略称関西労映）を発足させます。当時，歴史的な東宝争議が闘われていたが，日映演傘下組織の一として北大阪映画サークル協議会を結成，その委員長に就任します。書記　梨木一昭。

爾来，昭和五十二年四月二十日，山本明が病に倒れるまで，二人は全大阪映画サークル協議会の運動に従事してきたのであります。

昭和五十二年四月二十八日　　古　志　　峻

◇　追記　1

一九七七年四月二八日，尼崎市労働福祉会館でおこなわれた，山本明追悼式で使用した文。事実関係について若干補訂。年号表記は当時，昭和をつかいました。

◇　追記　2

年号表記は，当時の式参列者を考えて「昭和」年号をつかいました。コップ，IATB，プロットなどの略称もそうです。日本の共産主義運動も，一九三〇年代，四〇年代（転向，非合法，非転向派の諸流），四五年以後六〇年代（所感派，国際派）にかけての諸流も，一九三〇年代のコミンテルンを基準にして記述しています。

◇　追記　3

山本　明は，一九三〇年代いらい四〇数年間　無産者政治（社会・文化）運動の記録文書・ビラ・チラシ・その他を蒐集し，山本明　社会藝能文庫と命名していました。別記　リストは，その内容です。

リスト整理　　山　本　愼　一（山本　明　長男）